

# 海外レポート

## 知識人の役割

—ロンドンをぶらぶらして考えたこと

荒木映子

ロンドン大学のカレッジの一つパークベック (Birkbeck) が Institute for the Humanities を設立した時、新聞のコラムには、「一体知識人が世の中のためになるようなことをしたことがあるのだろうか?」という冷ややかな反応が表れたという。このコメントは、インスティテュートのウェブサイトにもパンフレットにも掲載されており、ここでのセミナーに出席した時に主宰者が挨拶の中で最初に紹介したのもこのエピソードだった。もともとロンドンの勤労者を対象に、夜間の大学教育を提供するためにつくられたパークベックには、これははなはだお門違いのコメントと感じられただろうし、インスティテュートの設立こそ、知識人が公的な役割を果たしていることを知らしめるのに、まさにうってつけの機会としてとらえられたことであろうと思う。

2007年10月から翌3月まで、正味5ヶ月間をロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ (Royal Holloway) 校の academic visitor として過ごした。在職21年にして初めての在外研究である。ロンドンの南西 Surrey 州 Egham にあるこのカレッジに行くには、市内から電車で1時間半程かかるが、ここには、週1回、Tim Armstrong 教授の英文科大学院のモダニズムについての授業を見学するために通った。10人余りの受講生のうち、台湾、中国、ドイツからの留学生が4人はいたと思う。1学期10週から成る毎週の授業内容、取り上げる文献の詳細があらかじめ示されていて、真面目に取り組めば、相当の準備が必要な量である。日本の英文科なら、半年くらいかかってこの1回分くらいしかできないかもしれない。特に留学生は遊ぶ時間もなく真剣に勉強していたのが印象に残っている。私は気楽な身分のおかげで高みの見物をきめこんだ。

ここ以外に頻繁に通ったのが、ロンドン大学 School of Advanced Study の一つ Institute of English Studies が催す各種セミナー、レクチャー、カンファレンスである。ロンドン大学は、パークベックやロイヤル・ホロウェイを含む現在19のカレッジと、12のインスティテュートがそれぞれ自立しながらゆるやかに連合する federal university であるが、School of Advanced Study は、う

ち10のインスティテュート (大学院レベル) が集まって運営している。Higher Education Funding Council for England がこの主な資金源となっているとのこと。Institute of English Studies は1999年に設立されて、W.B. イェイツの書誌的研究で名高い Warwick Gould 教授が director を務めている。この本拠地は、地下鉄 Russel Square 駅近くの Bloomsbury 地区にあり、セミナーやレクチャー等は、ロンドン大学の本部と図書館がある Senate House の古くて暗くてエアコンのあまりきかない部屋や、すぐ近くの新しい Stewart House で催された。これらは原則的に無料で一般公開されているので、聴講するためにロンドン大学に何らかの籍を置いている必要はない。月曜日から土曜日までほぼ毎日何らかのプログラムが用意されていて、講師陣は、ロンドン大学だけではなく、イギリス各地の大学や、時には海外からも、この2時間くらいの小規模の催しのために招かれていることは驚きであった。

たとえば、11月の第2週はざっと次のようなプログラムである。

12日 (月) 17:30-19:00

Publishing Science: Seminars in Book History and Bibliography

13日 (火) 17:30

Inter-University Postcolonial Studies Seminar

15日 (木) 16:00

The Building of Senate House

15日 (木) 17:30

London Seminar in Digital Text and Scholarship

17日 (土) 09:30-17:30

CONFERENCE: Jane Austen and Endings

17日 (土) 15:00-18:00

London Nineteenth Century Studies Seminar

このそれぞれに一人もしくは二人の講師がいる。カンファレンスは一日かかりで、当然もっと多くの講師が登場し、いくらか参加費がかかったように記憶する。終了時間が書かれていたり、書かれていなかったり、開始時間の間違いがあったり、大らかなものである。時間通りに行ったのに、半分すんでいたことがあった。「本の歴史」「ポストコロニアル研究」「ロンドン19世紀研究」「モダニズム」のようなセミナーのシリーズが、計20種類くらいあり、約ひと月に1回のペースで会合がある。モダニズム・セミナーの場合だと、いくつかのカレッジの研究者がオーガナイザーとなって企画・運営し、ロンドン大学を中心に研究者や院生約20名くらいが毎回出席していた。一般公開といってもやはり参加者は限られているのかもしれない。モダニスト作家が取り上げられて

も、文化研究の視点が入り入れられている場合が多いし、ファッション・ショーとモダニズムとか、写真における偽装された「未開」とか、文学から他の学問分野に越境していくスリリングな発表が多かった。かと思うと、エズラ・パウンドやウィンダム・ルイスやジェイムズ・ジョイスの難解な作品を精読する会もある。上のプログラムの‘The Building of Senate House’は、この建物が1930年代に建築された時のフィルムを上映し、建築家がレクチャーをするというもので、Senate House 図書館友の会による主催である。第二次世界大戦当時情報省がここに置かれていたこともあり、ジョージ・オーウェルは、この建物にインスピレーションを得て、近未来小説『1984年』で徹底的な管理社会を象徴する「真理省」を描いた。威風堂々とした外観を誇るが、目下大規模な改装中で、リフトはしょっちゅう故障していて、そこに閉じ込められていた人が救出される現場を見て以来、4階か5階の図書館（ロンドン大学共通）に行くのに必ず階段を使ったものだ。日本の消耗品文化なら、とっくに解体されて新しい建物に変わっているところだが、使い勝手が悪くても歴史を形として残そうとする精神はイギリスのあらゆる所で感じられた。これらの会合の前半のレクチャー部分は、文学・文化研究の最前線に居合わせるような気がして、面白かったが、後半の活発な質疑応答もまた楽しみであった。

さて、ロンドン大学は、School of Advanced Study に包括される各インスティテュートの公開セミナーの類以外に、各カレッジが独自に同様の催しを行っている。この記事の冒頭で書いたパークベックの Institute for the Humanities は、1月に4人の歴史学者による“‘The State We’re In’—Manifestos for History”というワークショップを開き、2月には、スラヴォイ・ジジェク (Slavoj Žižek) による恒例のマスターコース‘Embedded in Ideology: The Case of Cinema’を5日間にわたって開催した。どちらの催しとも、100人くらいはいたと思われる聴衆の熱気で、パークベックの地下の窓のない教室はむせ返るようだった。ハリウッド映画のようなポピュラー・カルチャーを広範に参照することによって、哲学、政治学、精神分析学に新風を吹き込むジジェクは、知識人と大衆をつなぐ役割を果たすのうってつけの存在である。現在 Institute for the Humanities の International Director という肩書きを持っていて、このマスタークラスの講演の内容はそのまま彼の数多い著作にただちに加えられていくようであった。なまりの強い英語で理解するのに骨が折れたが、毎回講演が終わるや間髪をいれずに質問が続出し、かなりジジェクの著作に精通している人達が出席していると思われた。どれだけ一般の人が参加していたのかはわからない。しかし、正規の授業以外に、大学がこれだけ充実

したレクチャーを公開し人を集められるということは、驚くべきである。豊かな人材と財政的基盤、それにそれらを受け入れる知的土壌がなければできないことではない。

British Library, National Portrait Gallery, Victoria and Albert Museum, Imperial War Museum 等々、ロンドン市内にある多くの公共文化施設も、独自に、あるいは大学や学会と提携して、市民にさまざまな勉強の機会を提供している。大英図書館では、11月から3月まで、‘Breaking the Rules—The Printed Face of the European Avant Garde 1900-1937’という、ヨーロッパ各地で展開されたアヴァン・ギャルド運動の文献（雑誌、原稿、チラシ、写真、録音等々）の展示が行われたが、これに関連するレクチャーやトーク、シンポジウムが目白押しであった。日本でも展覧会にあわせて講演会が企画されたりするが、その数が違う。そのほか、大英図書館がさまざまな文献検索のためのセッションを一般向けに開いたり、ロンドン大学から博物館に研修に行ったりというような連携プレーが日常化している。美術館や博物館では、先生に連れられて来た小・中学生が、絵の前にしゃがみこんで模写をしたり、与えられた質問用紙を持って博物館員に質問しては答を書き込んだりしている光景をよく見かけた。オスカー・ワイルドの劇を観に行った劇場には、学校から観劇に来ていたし、小さなナイチンゲール博物館では、小学生がクリミア戦争の時の軍服や看護婦の服を着せてもらって、同じく扮装した館員からナイチンゲールの話を聞かせてもらっているところに出会った。イギリスの主な美術館、博物館は特別展を除いて入場無料であり、しかも、無料のガイドつきツアーが毎日時間を決めて何回も行われていることも、こういう施設を市民にとって身近なものにしている理由であろう。

ロンドンにいる間中、観劇も含めてこういう文化的催しに出かけて行くことがとても楽しみだった。美術館のカフェテリアでおいしいとは言えない昼食をとると軽く10ポンド（1ポンドは当時250円、この校正をしている2008年12月現在、何と130円代に暴落！）はかかるし、地下鉄の初乗り運賃は普通に切符を買うと4ポンド、アパートの家賃は一部屋でもひと月2000ポンド近くするという、すさまじい物価高をしのぎ（大学からいただいた資金は全く足りませんでした）、日本と比べると生活の至るところに見られる「いい加減さ」に何とか耐えられたのは、この文化の厚みのおかげだったかもしれない。大英図書館や National Archives at Kew の読書室に陣取るあの連中は一体誰なのか、劇場に詰めかけるあの人達は…？といぶかるくらいに、これらの施設は閑散としていたためしがない。まさか、私のように半年休みをもらってロンドンをぶらぶらしている人達ばかりではない

はずだ。英語が世界共通語のようにになっているせいだけで、各地から人がロンドンに集まってくるのではなからう。文化や歴史が大切に保存されているだけでなく、それらを惜しみなく公開する姿勢がなければ、これほど人々を惹きつけることはないだろう。帝国戦争博物館のドキュメント部で、きちんと一人ずつファイルに入れられた、第一次世界大戦の従軍兵士所持のメモ帳や手紙を手にした時は、思わず指が震えた。申し込めば、誰でも閲覧が可能である。

ロンドン市内では、ダブル・デッカーと並んで、蛇腹で2両を連結したバスが混雑した通りをぐねぐねとのたうちながら走っているのをよく見かけた。このバスを見るたびに、細かいことはどうでもよくて、本道を見失わなければいい、少々バスの先端がどこかに接触したって知ーらないっ、と言わんばかりのアングロ・サクソン精神(?)の表れであるように思ったものだ。交通渋滞のために、バスを途中で降ろされ、乗り換えてもまた降

ろされて結局歩くはめになったとしても、大局から見ればどうでもいいことなのだ。電車が1時間遅れようが、お釣りの計算を間違えようが、大勢に影響はないのだ、ということなのだろう。日本はすべてにおいて合理的で、住みよいことは事実だけれど、優先することを取り違えているような気がしてならない。英語がしゃべれるようになる前に、するべきは日本独自の文化を守ることだ、と国粹主義的なことが言いたくなる。まず、日本語を勉強したい気にさせるほど、日本への興味を起こさせること。漫画文化だけが日本だと思われているのは残念なことだと思いませんか？

半年間、気ままに遊んでいたみたいなのに、これを読んでくださった方は思われたかもしれないが(一体何人の読者がいるのだろうか? 編集委員だけか?), 成果のほどは、『第一次世界大戦とモダニズム——数の衝撃』(世界思想社, 2008年)をお読みください。